

A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE



日本の文学

47

林 芙美子

中央公論社

日本の文学 47

©1964

林 芙美子

昭和 39 年 6 月 25 日初版印刷

昭和 39 年 7 月 6 日初版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋 2 丁目 1 番地
電話 (561)5921(代) 振替東京34

目次

蒼馬を見たり	5
放浪記	27
風琴と魚の町	120
清貧の書	137
牡蠣	158
晩菊	181
骨	197
水仙	211

下町
浮雲

注解
年譜

口絵
挿画

自画像

林芙美子

「蒼馬を見たり」「風琴と魚の町」

「清貧の書」「牡蠣」「晚菊」「骨」

「水仙」「下町」「浮雲」

森田元子

「放浪記」

織田一磨

平林たい子

497 486 475 237 225

林
芙
美
子

蒼馬あほうまを見たり

黄いろなる黍畑とぎの風も
黒い土の吐息といきも
二十五の女心を濡ぬらすかな。

海ぞいの黍畑とぎに

何の願ねがいども

固かたき葉の颯々ささと吹き荒れて

二十五の女は

眞実命を切りたき思いなり

眞実死にたき思いなり。

ああ二十五の女心の痛みかな！

細々と海の色透すきて見ゆる

黍畑とぎに立ちたり二十五の女は

玉蜀黍とうもろこしよ玉蜀黍！

かくばかり胸の痛むかな

二十五の女は海を眺めて

ただ呆然ぼうぜんとなり果てぬ。

一ツ二ツ三ツ四ツ

玉蜀黍の粒々は二十五の女の

佻わびしくも物ほしげなる片言なり

蒼あおい海風も

黍の葉のみんな気ぜわしい

一人一人の心故——

眞実友はなつかしけれど

さても佻わびしきあきらめかや

眞実世帯に疲れる時

生きようか死のうか

そは悲しくむつかしき玩具ゆえ

眞実男はいらぬもの

二十五の女の心は

ここまでたどりつきたる

玉蜀黍は儂なまなや実が一ツ

延のびあがり延のびあがりたる

やけなそぶりよ

二十五の女心は

一切を捨て走りたき思いなり

片瞳をつむり

片瞳を開き

ああ術もなし

男も欲しや旅もなつかし。

ああもしよう

こうもしよう

おだまきの糸つれづれに

二十五の呆然と生き果てし女は

委烟のあぜくろに寝ころび

いっそ深くと眠りたき思いなり。

ああかくばかり

せんもなき

二十五の女心の迷いかな。

——一九二八、九——

蒼馬を見たりに

古里の厩は遠く去った

花が皆ひらいた月夜

港まで走りつづけた私であった

朧な月の光りと赤い放浪記よ

首にぐるぐる白い首巻きをまいて

汽船を恋した私だった。

だけれど……

腕の痛む留置場の窓に

遠い古里の蒼い馬を見た私は

父よ

母よ

元気で生きて下さいと呼ぶ。

忘れかけた風景の中に

しおしおとして歩む

一匹の蒼馬よ！

お私私の視野から



M. Morita

今はあんなにも小さく消えかけた
蒼馬よ！

赤いマリ

古里の厩は遠く去った

そして今は

父の顔

母の顔が

まざまざと浮かんで来る

やっぱり私を愛してくれたのは

古里の風景の中に

細々と生きている老いたる父母と

古ぼけた厩の

老いた蒼馬だった。

めまぐるしい騒音よみな去れっ！

生長のない廃屋を囲む樹を縫って

蒼馬と遊ぼうか！

豊かなノスタルジヤの中に

馬鹿！ 馬鹿！ 馬鹿！

私は留置場の窓に

遠い厩の匂いをかいた。

私は野原へほうり出された赤いマリだ！

力強い風が吹けば

大空高く

驚のごとく飛び上る。

おお風よ叩け！

燃えるような空気をはらんで

おお風よ早く

赤いマリの私を叩いてくれ。

ランタンの蔭

キングオブキングを十杯吞ませてくれたら

私は貴方に接吻を一ツ上げましょう

おお哀れな給仕女

青い窓の外は雨のキリコダマ

さあ街も人間も×××も

ランタンの灯の下で

みんな酒こなつてしまつた。

カクメイとは北方に吹く風か……

酒をぶちまけてしまつたんです

テーブルの酒の上に真紅な口を開いて

火を吐いたのです。

青いエプロンで舞いましょうか

金婚式！ それともキャラバン……

今晚の舞踊曲は——

さあまだあと三杯

しつかりしているかって

ええ大丈夫よ。

私はおりこうな人なのに

ほんとにおりこうな人なのに

私は私の気持ち

つまらない豚のような男たちへ

おしげもなく切り花のように

ふりまいてゐるんです。

カクメイとは北方に吹く風か……

帰郷

古里の山や海を眺めて泣く私です

久々で訪れた古里の家

昔々子供の飯事に

私のオムコサンになつた子供は

小さな村いっぱいにツチの音をたてて

大きな風呂桶にタガを入れている

もう大木のような若者だ。

崩れた土橋の上で

小指をつないだかのひとは

誰も知らない国へ行つてゐるってことだが。

小高い蜜柑山の上から海を眺めて

オーイと呼んでみようか

村の人が村のお友達か

みんなオーイと集まつて来るでしょう。

疲れた心

その夜――

カフェーのテーブルの上に
盛りばな
盛花のような顔、……

何のその

樹きの上にカラー

夜は辛い――

両手に盛られ、

わたしの顔は

みどり色のお

十二時の針を

鯛を買う

――^{*}たいさんに贈る――

一種の、コウ、ファンは私たちには薬かも知れない。

二人は幼稚園の子供のように

足並そろえて街の片隅かたすみを歩いていた

同じような運命を持った女が
同じように瞳と瞳をみあわせて淋しく笑ったのです
なにくそ！

笑え！ 笑え！ 笑え！

たった二人の女が笑ったって

つれない世間に遠慮は無用だ。

私たちも街の人たちに負けないで

国へのお歳暮せいはらをしましょう。

鯛はいいな

甘い匂いが嬉しいのです

私の古里は遠い四国の海辺

そこには

父もあり

母もあり

家も垣根も井戸も樹木じゆもくも……

ねえ小僧さん！

お江戸日本橋のマークのはいった

大きな広告を張っておくれ

嬉しさをもたない父母が

どんなに喜んで遠い近所に吹かちようして歩くことでし

よう

——娘があなた、お江戸の日本橋から買って送って
くれましたが、まあ一ツお上りなして

ハイ……

信州の山深い古里を持つ

かの女も

茶色のマントをふくらませ

いつもの白い歯で叫んだのです。

——明日は明日の風が吹くから、ありったけのせいで

買って送りましょう……

小僧さんの持った木箱には

さつまあげ、鮭さけのごまふり、鯛あめはの飴干し

二人は同じような笑いを感受しあつて

日本橋に立ちました。

日本橋！ 日本橋

日本橋はよいところ

白い鷗うみづめが飛んでいた。

二人はなぜか淋しく手を握りあつて歩いたのです
ガラスのように固い空気なんて突き破つて行こう

二人はどん底どんぢを覗のぞいながら
気ぜわしい街ではじけるように笑いました。

馬鹿を言いたい

——古里の両親に——

千も万も馬鹿を言いたい……

千も万も馬鹿を吐ど鳴なりたい……

ただ何とはなしに……

こんなにも元気な親子三人がいて

一升の米の買える日を数えるのは

何という切ない生きかただろう。

呆然ぼうぜんと生きて来たのではないが

働き馬のように朝から晩まで

四足をつっぱつて

がむしゃらに

食くべいたいために

ただ呆然と生きて来てしまった！

親子三人そろつて

せめて

千も万も 千も万も

馬鹿を吐鳴なつたらゆかいだろう。

酔 醒

なつかしい世界よ！

わたしは今酔っているんです。

下宿の壁はセンベイのように青くて
わたしの財布に三十銭はいつている。

雨が降るから下駄かたを取りに行こう

私を酔わせてあの人は

何も言わないから愛して下さいと言うか

何も言わないで愛しているのに

悲しい……

明日の夜は結婚バイカイ所へ行つて

男をみつけましょう——

わたしの下宿料は三十五円よ

ああ狂人になりそうなの

一月ひとつきせつせと働いても

海鼠なまこのように私の主人はインケンなんです。

煙草を吸うような気持ちで接吻でもしてみたい
恋人なんていらぬの

たった一月ひとつきでいいから

平和に白い御飯がたべたいね

わたしの母さんはリョウマチで

わたしはチカメだけど

酒は頭に悪いのよ——

五十銭ずつ母さんへ送っていたけど

今はその男とも別れて

私は目がまいそうなんです

五十銭と三十五円！

天から降ってこないかなあ

恋は胸三寸のうち

処女何と遠い思い出であらう……

男の情を知りつくして

この汚らわしい静脈に蛙が泳いでいる。

こんなに広い原っぱがあるが

貴方は真実の花をどこに咲かせるというのです

きまぐれ娘はいつも飛行機を見えていますよ

真実のない男と女が千万人よったって

戦争は当分お休みですわ。

七面鳥と狸！

何だイ！ 地球飛んじまえ

真実と真実の火花をよう散らさない男と女は

パンパンとまっぶたつに割れっちなまえ！

善魔と悪魔

まあとにかく貴方との邂逅を祝しましょう

——淋しい人生じゃありませんか

全く生きていることが

イリニューションではないかと思うことさえありますよ

あるいはそうかも知れないけれど

このごろつくづく性欲から離れた

心臓が機関車になるような
恋がしてみたいと思います。

性欲アナーキズム

貞操共産主義も鼻について来ましたからね

やっぱり私の心臓の中にも

善魔がいるんですね。

——驚きましたね

悪魔が私を裸踊りさせるように

善魔は私をおだてあげるのです。

まっって下さい！

今に人間生死薬を発明するつもりです

全くいつも思うことですが

広い海の上をひとつばしり

歩ける機械が欲しいですね

——まあゆっくり話しましょう

まだ生きていますんでしょう……

貴方も私もまだ二三十年あるんです。

小さな地球の上ではからずも

貴方と邂逅したことは

因果を説かなくても当然のことですよ

人間万事タナカラボタモチ主義

思えば数え切れないほどの主義がありますね
それも皆善魔と悪魔の戦いです。

結局は大口いっぱいの空です

どうです十本入り六銭の

蒼ざめたバットでも吸いません

そして愉快に

笑って今日の邂逅を祝しましょう。

灰の中の小人

今日も日暮れだ

灰白い薄暗の中で

火鉢の灰を見つめていたら

凸凹の灰の上を

小人がケン粒のような荷物をもって

ヒョコヒョコ歩いてる。

姉さんくよくよするもんじゃないよ

貧しき者は幸なりってねへっへっ
ああ疲れた

私はあんまり淋しくて泣けて来た
ポタポタ大粒の涙が灰に落ちると
小人はジュンジュン消えていってしまった。

秋のこころ

秋の空や

樹や空気や水は

山の肌のように冷たく清らかだ。

女のようにうるんだ夜空は

たまらなくいいな

朝の空も

夜の空も

秋はいいな。

青い薬ビンの中に

朱いランタンの灯が

フラリフラリ